わし葉集

坤

新宮圖書

へ 5
1888

閑居箴　芭蕉庵

あら物くさの翁や日比は人のと
ひ来るもうるさく人にもみえし
人をもまねかしとあまたゝひ
心にちかふなれと月の夜
雪のあしたのみ友のしたはるゝもわりなしや
物をもいはすひとり酒のみて
心にとひ心にかたる庵の戸おし
あけて雪をなかめ又は盃を
とりて筆を染筆を捨つ
あら物くるをしの翁や
酒のめはいとゝねられぬ夜の雪

牧童傳

牧童はもと小松乃あふ生にして賀の産
住ミ居るをもつて家ハ御刀の業
殊ことによきたつきとなせり
兄牧童は彼の兄として北枝は其ゝ
弟くえしより謝公ゝも䌓践あつまりて
されバ是も須家の富貴をさと
義須まじ只同袍のむつれにあのつかひ
翁の人の請ともいくりて蕉翁の
門に践莫逆中れハ芭蕉の門に
入りて風雅を接へれハあつさ
とにに接ふ不同うしれたまくハ一草
生すらおろの彼を様の花の居

時は是れ平敦盛の[illegible]
[illegible]にかゝりてと云は出家して[illegible]の事なり
さるにしも旅の空の郭公をきゝても[illegible]
鳴きつれて来る蝶の様にも思ひまする
て此の席定の會は人の[illegible]
時々の眠をさまして生涯の宝物となる
或る時は桜の花の下枝或る時は秋の
[illegible]眠りを[illegible]眠りをさまして[illegible]
然れば春秋ともに此の道は貴人も是を
もてあそび[illegible]も是を[illegible]
[illegible]の[illegible]も眠りをさまし
[illegible]湖南翁の[illegible]あるは[illegible]
にて牧童は[illegible]と申されし
[illegible]てあらしやあらして

おもしろや是を翁の[illegible]
[illegible]は生天にも[illegible]へとても出来
御[illegible]をはなれし[illegible]人の
心と人は[illegible]の人に似てや侍る
牧童も[illegible]の[illegible]の
翁は[illegible]くて其の京の[illegible]
一 葉裏[illegible]蓮風[illegible]と云句
の[illegible]は白[illegible]蓮と[illegible]小唄
[illegible]
何[illegible]の[illegible]
我[illegible]して実に小人は人の[illegible]
[illegible]深く[illegible]
[illegible]
[illegible]人は世に[illegible]

梅か香よもしの坂越て又もと
錦木の中にかまへて風雅てや
かなし
東花坊贊して曰世にうつの人余生の
是なれは歌の心なしとて諸能の法
師とはいへ歌に縁なきは首の俗
識て都の津てまいらうと世にれる
某して世よりの上人ひとり剣かのいさ
のいと清けなりかしこきとなる程の
中にも彼杜甫の寺ましくは猶と
是れと定めれたりとや云へき猶その
歌をと西行もこの歌にておもなき
定かに眼にして腹て返しきれなり
又将とるかうし和歌の師ふ

絶て居眠りもし世にもこの海しく
なしまうゆしかうち上人は目の前
たりし時に俳諧熱世にも行し
もしかして俳諧は人の心に依て
しりや只歌人にも非なり然も
人又おもしろくされは歌と西行これ
此誇に是生てさて俳諧は非なり
今に見りやましかは人の心を和
けてをいる哉の花なりまさしく花
かなをもしとて我世の文の味と
おもしかの世をれは然すゝからうと
又やと一草の好みなる俳諧をたゞ
戯まいふに枝ふ世にもたれ
盃て枝ふ時は神外筆にて世に出

牧童の名をおしむもとしれぬ
いはゆる素子童子之道に哲かるへ
此かの翁あんで存りて一字
を照の乳をふきまれとなる

元禄三庚午中秋　支考菴記

草刈笛

表の歌仙

黄鳥や一声鳴てあちら向　秋之坊

塒根有梅の寒さは咲揃　牧童

落の葉を取ふり程雲なくて　支考

あれは茶漬の匂ふなるらく　北鯤

浣濯乃郷まりて唐船の月　八紘

秋もと笑に風のはいかく　坊

何ごとくいふ寒よ来て星の秋　二重

破子こ持してたつしはなる込む

舩宿も閑かは穣娑羅ものか　[illegible]
見ぬ恋をうとらぬかれとらはら　紫
別中にくらやし浅き松橋　坊
涼しさに覚しるゝ魚釣ありける　童
畑もものたえこ春なる川向ひ　[illegible]
あくる迄て雪のさかりか　我
桜に姜の中ゆる風巾　紫
因に樽ぬれ草のちりもなし　坊
月かぬれ野は寺とけの德道　童
花ぶる人の見へぬ里の家　老
酒の能は球に成もなき鏡なる　緒

笹の出するゝ小笠出でもない　紫
湯上りの下駄など拾ゝ讃ゝれて　坊
二階の客は古き三味線　童
活れなき急と三度まて泥た　老
我ものを小町と呼けへうて聞　緒
律蝦程の鴻ゝと念佛申ぬ　紫
夜すはの暁はゆるく小鼓　坊
あれて来た時雨の空の三日月　童
田中の松の鶴の居出る　老
山椿に樽ぬれ橋小蕃して　緒
秋遊りさまるゝ入のまつゞ　さ

柿もれて囲炉裏の端に玉子乱　坂

足へまつはい庚申の若　童

蕎麦川残は咲くと安居の川さして　老

たゆめの抜山ありさとるろ　猪

めつらしきかこつ静か栗の軌　史

雲雀の声の川を理れ　葦

艸刈笛

麦の歌僊

湯上りの読やそこの白牡丹　従五

芥子の風ありかくや葉の薫る　牧童

静の空と峯は雨晴れて　村隠

堅中乃川の常に添て　秋青

柾きとをよ花連は旅の月　如丈

酒りみ酒あり川の樽居　師学

お数奇は垣根を見残し秋の山　童

霧のかゝる水の目と離なる　吾

聴の声の朝と思へは虚して　青

茄子の白き桶のちゞみ　隠

山風の使あり爺残隠れ庵　学

天の岩は段いまれた提灯　丈

乳ちゝは針ない小桝よって　吾

鳥の旧雲鷺鳥の明けかな　童

登ゝ丹濱の鳥居に詣させて　陰
花流れあつ上座舟の舳笠　青
宮方は花も月も添て茶　丈
楠は雲の衣きたる秋　棠
赤札さへ由利講中にさんとふ　豪
若き形の風を似せる子つき　吾
おもの娘戸おして庭のもとを別　青
文筥の中は春の白筆　陰
仕人の門に呼く又明表　堂
紅葉ふうか加色喰の口中らつ
鐵銭の茶碗まで何も隠す河原　丈

お袋は暗ほど子あるり　季
物の降る月は面白し傘　陰
一里く遠い風呂銭仕ふて　青
棚からも重ね掃や播の五器　丈
潤る市で呼ハ数にむせて居　棠
若ふりも子細に明豆銭あまる　童
八幡これは紙日和なり　吾
鶯の声は蒔ハ　ちと古し　青
餅は浅草に花またれまね　陰
巻きちつてはすは一重数　丈
嫁の心はいかやらし　歳暮　堂

卅以句

猫乃河伯

華精や亀井戸出る蛙坊　雨考

赤ひも返理酒に和葉〻　牧童

名月の画幕あきつ見遊せて　鳥水

舟りうきうひ風の吹やり　山隣

ふふは親父かとせり雑煮　魚素

さりといなしさし息となりけり　青

蚊帳の窓から猫う日のきして　壺

鍋ふ子かえやれ飯焚て来　水

八朔も牡丹ふえ川をいさしかて　隣

長閑は今立江乃　秋素

麺搔てあくいまませんとて元文紀　青

信夫の月の相生えいふ雨露　童

いちのこゑふ月顔は葉た秋　所

風ま吹く光る声のみ〻声　隣

河ちかくいこちさいちの〻ふもちの　素

来るを草陰来るを草隠　青

出替りとなりま鬼に捨子也　童

佛むかうの朝ある秋の家　水

雪隠の道に隣とはやいまく　隣

個うし俳ててあとをうさん　素

生菓乃様小院て浦潟　素

俳諧まてゐ秋ちらへゑとなり　童
東男浮世に見ゆる天窓一杯　水
猫子なうてむ時々ならずさる　隣
煉酒を楽ゐの柳冬枯て　素
いはれぬ世より田楽の二字　青
大男小男にいはぬ盃哉へ　童
耳の中へ思ひ髪をはじめ伽に　水
扇紙は月のさして東哉を更まて　隣
中川出給出蝉乃声　素
落ちる萩の上風女萩の下露　青
にて秋をたちとるまてよしのの　童

雑レ入てみろう祖父の祝ぬたり　水
さいさしの美いは彼岸まゐる　隣
いつころ月和を路ゐ盆をせし　素
笠は出来ゐ屋てなけろふ　筆

艸刈笛

冬もち戯仙

ころも麻ぬ花やゆ行冬の月　桐之
千鳥鳴き末氷る舟の行灯　牧童
橋通る木履の音に目のさめて　従吾
飲ちらしたれ置帯四　秋之坊
おとかぬ鳴奥に面白う来り　支考

わら竹の筏楫のそそゆるゝ
小桁まり射弓く舞うて矛典遊
鶺鴒ことろ舟 宮乃石壇
眺乃竹りまわ琵琶乃海
里沙り烏帽子の新学けるゝ
草の香お絶段之梔をかふれ
蟷とも夜には応し欄板の窓
舞ふ人の羽たゝる黒袖
後家の二㡡お対ゝ名の土
寺家の小雅に家遣た栢の人
末若路お稽の歌と袮ゝ
御私方の来ゝと並びり一両の袁

之 童 吾 坊 老 之 童 吾 坊 老 之 童

須正ひまとら極浩の和禽あ
黄鳥小水の中よりも自要之
紅日おこ尺の動ろし山 ゆ
茂盛の玉の吾遠硯 稲ゆゝ
とちそそといそて和物是の方
暖簾の奥なりしき菜花
安明ろし翁ゝ山茱萸の雪
光球の一ゐ上小鏡 綾おゝ
三日月 錦の戻ろ 怖いお
行水を飯とこ戻アそし合て
膝くみをう晩にて過てはし

吾 坊 老 之 童 吾 坊 老 之 童 吾

秋ぞ成月ハことに夜ぞ寒き　坊
人の夕暮すくなく虫　考
萬の葉の露のまがはぬ風　之
打越はつれし棚の菊の花　童

卅川箇

餘興

乾鮭の乞して咲る花乃嵐　浪化
紙子の襟に菫紙乃花　万子
茶播を掃除の夜を明入て　支考
書状の手形乃判見せて迷ル　牧童

飲（のまし）ましして鯰（かに）の青き猫の孫　化
鰯（はらそ）不ハ味噌にて又飯乃こて　化
舩は帆の風をまちて音の　枝
鳥もちも光秋高く姑豺　子
山様よ聖山の錦染けて　考
檳榔笠乃僧一人行　童
こる病て東坡ハ布に成りて　化
火燵きしいの庭の隠無　枝
郁迭けき根を消さる月の影　子
読分き海の菫乃図　考
まりかへて湯るハ送事に袖濡て　童

風敷の首尾は語る中こ　化

上郎流のされは黄髪ふるかな　枝

光り川出る神の雨　子

比叉乃絵馬に旅を信ぬれて　耇

妻の乃行衛ふ白のさた　童

坂越ゆる人は待兼れは花かけ　化

稲ふ川て遊ふお礼の出宗さ　枝

正月のいなれは語ふ隣擾て　子

今度の家も鬼にかふるゝ　耇

夜詰は往来の橋伍の櫃部らし　童

攪ゝきれていねさくそふ　化

猫鳥畢て南風吹いくかと鳴ある　枝

さけの格慕をふ毎にん見送る　子

一間こを抱物は指こえのたるゝ　耇

雪乃降る東へ蝶ん咲くゞる　童

山里に流中ゆ川風の吹脆　化

糧々手し鞁打さゝせん　枝

友達の呉名の中に鶴美　子

葬礼たる時こそ礼直へ表ある　耇

小雪に赤いむさる鰭湖　童

妹てて来る礼帷子ゝ辻　化

きゝて次郎左家はいさそ付く　枝

秋風ふく竹格子に母　子
鄉のみ句に絶し琴揺　巻
茶湯に了咲ヽのに　壺
辛すまし花ぬ天宮も無風流　化
鉦うちならして頼ぬ此物語　枝
重ね行南天の露は合点之　子
何れ大江戸子れ世々　巻
蔵入の盆は通れる蔵とみる　壺
杉の三川真なる墓　化
書出し小雨りて月るし　枝
見るは大さとかて此世の月戴君　子

誰が家のつまり安年の春の時　筆
従集我なり藤よ山吹ヽ

池乃蛙序

蛙飛込む水乃音と詠玉ひしは
世に廣し芳野の曙も秋乃
限りなき新緑も更級の月は
其の下なる池(?)蓮の葉の味(?)
いはて井乃字も(?)の言葉成(?)
書しるされたるを云(?)古池の
昔を忘れぬ好の(?)節葉(?)云乃嬉(?)に
与(?)此徒句を集めて池の座(?)
吟ることゝなる生野(?)

掃月庵

池の蛙

田あるとこ家路萱(?)の蛙かな　半路

真白

雨乃蛙声は高になるも哀也　素堂

ちうしこ(?)蛙なく　真角

いたいけは蛙つくばふ浮　仙化

よしなしや小網(?)の芥と隠く蛙　嵐雪

一睡もしたし鳴止むか川面(?)　李下

あちらこちらいつまでもなく(?)に　紅林

うき時は蟇の遠音と雨夜かな　そら

哀にも蝌蚪(?)つたふ筧哉　枳風

玄賓乃心ちこそはなく(?)蛙　野水

夜は水の力てしらぬ川面かな　丈石

継橋乃ながめ顔あり行蛙　采卜

夕月夜蛙も聲をそへる蛙かな　琴風

張揚なき日代鳴蛙のかな　乙由

あふむいて蛙や池の夢さます　推巴

行末やたよりなくして鳴蛙　麦士

辨天に謡つゝてなる蛙かな　十午

深き青空に中ぬれて鳴く蛙　巴静

鳴蛙ことに色さす長閑かな　馬千

已に出て已にこの岸まで蛙かな　芳汎

村雨の艸より出たる蛙かな　芳郷

寺まいり乞食の先へなく蛙かな　丁固

狐あらふ先にわらし熱い川かな　呂川

痛風来い御ゆるすく蛙かな　全枝

降りと蛙に何ふや雲の峯　梅雅

雲の夜ありまた呼ひくる蛙哉　来什

雨そゝし桜のこぼれ嵐に蛙　五絃

心ふかや岸の蛙乃みづのゝ　蓮川

赤貝乃穴残りてと蛙かな　文雅

深草の庵の畳へ飛蛙　吟之

泥亀は中にまちく蛙かな　立梅

水清の杖に飛つく小川哉　芦鶴

いさゝ川九月植して若町　秋長
琴音に乱込む声のさゝ川哉　錦子
啼蛙声々に請る艸の語　文長
八頭蛙声々は浮藻に跳る亀　米賊
暗夜東北請て挨拶蛙哉　雉長
蜂釣の空は暮るに蛙哉　萬路
井乃水に巳とまる蛙のさゝ川哉　一虫
田中の流に枕ふるさゝ川哉　樂水
風吹て声に聞え跳蛙哉　西鳥
飛かはして水に飛込さゝ川哉　寸長
聞し井や枕にちかき蛙哉　玉沾

春乃奥

未華には奥の子哉さくら柳かな　無倫
あれは塩集て東は猿之　支考
檜出し北轅敷中れ行藤（かな）　介我
野火とえ見ゆけし一下霞　露言
陽炎や焼野に敷く風の跡（かな）　立志
黄蝶は霞に東とも之北門　浮生
雉の尾も風さくさゝ葦かな　秋色
郷の児（子）は来てそちの森　沾徳
菜の花や胡蝶の遊ふ菊畑　沾洲

梅咲て尽成にけり人の顔白し　山人

世の中や縦横ひとつ居しき雉子　貴縁

鼻つまむ遠若の去宿梅咲　沾山

琴に組れ上りて毎に落花　貞山

手の及ぶ花の嫁中藤の棚　葛　尾谷

人の気の流れてやまぬ柳かな　半素

凍解や五十二相の足の近　和推

菜の花や稀に黒き鉄砲　一漠

涼しさに少し聞ゆるこゝちよき蘆かな　超波

草に咲く花とあらいや鮒かな　李丸

土筆の風に渡すいとどの蝶かな　宗瑞

手向けて酒のこぼれて尽くる花見かな　延尺

松高し梢に曜ひて藤の花　安士

菜の花の果哉空につゝきけり　柯木

藤棚の柱振るふ女かな　青瓏

菜の花や八坂へ月の峰の花　米昌

春の夜も白き男女の咲わたる　大梅

うき姫も琴の上手や垣の桃　棲川

建翅も唐茶も左にて涼しかり　破笠

去年々々小舟を出しける柳かな　謝柯

青柳や折り返しまつ風の車　文国

崩れて行やうに見ゆるや[illegible]　東之

咲からも花を見し汐干かな　巴山

こぬか雨梅ほかると桜は猶　蝸牛

何知は[illegible]ならちよ華　洲上

来雨加一日階に庭の石　雛川

花中くの曲しか車さえ[illegible]　芝舩

人もこ出ぬ讃[illegible]の桜かな　川二

あけぼのゝ春の空に[illegible]　貞朝

梅さくや桜[illegible]二夜三夜　玉芝

[illegible]見せして三景ふかぬ梅の宿　本川

何事残りよ見れ[illegible]の宿　金川

落の香外は[illegible]花実の一曲　半路

夏景

山伏の[illegible]八常せんかほとゝぎす　貞佐

世の中[illegible]来いかうして牡丹哉　長水

年寄は毒も薬[illegible]なた　蓮之

またれの[illegible]紀暑哉　洞里

豆腐見て涼風の吹残り　窓交

耳[illegible]味何利郭公　東江

梅子[illegible]　寸長

酒紅の音せ吹かれ星月宮　雨鳥

業平も小町と笑ふ玉霰の花　拾芳 雨人　倫里

若葉や鳥乃上海れ吉田宅　米川

今月雨やせ芦乃上形高瀬耳　半路

蓮乃花のところ表た続や

石菖や露取りと蓮の縁の上

夏景

さゝの葉雨残しても吹けば鳴る

掃月庵　半路

さゝの葉雨残るも吹けば鳴る

茂りの中へ茂れ竹乃子

若竹乃間為麦ふるかな

隣寺白きんなる夜半て

峯頌ぞ荷よ意先へ上るる哉

吹きませる尾花乙よう

椿子余る秋りの鳥ねかし

山家に月うく凉ふなる額

梅田小鳴と思ふ思川

行逢ふ残月見外てめかる

冥の夜莫原しられの聊しられ

来

鰐陀磨へ書ら人々をてなし
此堺より菜薬乃浅草寺
擣荒寄らし翁相申し候はは
此所の古き社の経と歌ふくみ
清く梅を書ひき紀れ
花のお色を拝し所の面白く
隣酒あり紀州の竹林
秋らしと蛇の穴より上らん
妙なる関と御乃姿見へ
須磨は高めつゝ一ノ谷の数
頼みを売り紀二郎使
引道筆も草子を話けて騎之跡

行きとぞ思ふ苦の右の
大和路みむろの宮と名付之
木須海の高砂尾上
松杉は峯〃とかけ駅ヶ崎若
須磨播磨とあらみの内
月今月寺ふ陣子ふ龍
縄のたてれ紀清水寺の紀
奈良の都は法華紀州の寺
生田の森ちより道へ湊の寺
淀羅の秋をさし軒ふ見て
小野なるへし郡の浮く

しばし大般太刀を先前に菖蒲鞠
如月の霞の月かささすれ

雨あかる雨降る蝸牛　半路
河骨ふ錦乃中竹に動きとも
雲の峯波の境ハ見えり色

蓮葉この古池の句を設て貞享三の春
仏化発記して蛙形作を編是今
半路ハ古池の句を筆して葉由形
作手吟し及びける乃一句を抄して
合せたりまあしはこの句に寛をも擲て

人の句を集めて去る夜四て十九
餘竜り其序に段あめ各之を
昔人と去能の事に句を続けく
一冊とそあし也コ中より句継ゆ文

行

左

辻堂小池の捩ふ秋寒き蛙や

右

大谷に庭の蛙しきりなり

芸と興と結び古風の序ゝ
そハ小生我楽しまと人多耽寂
物の寂しかる程は堅て絵こしふ
人見たゝ聖て業とれば山あり海あり

此句右並なしとて追加判いふ
八月廿日

東浩郭
来川

箕忠恩

一もとハ冬小しても菜なゑ　素明
今爪鴫也雁見し尓わの免　郷往
印のまゝ女ハ葉かりの杼尓　文蓮
稲妻の手匠は秋の空也し　冠河
艸刈の根のうちの鶉かな　呂童
一日もいそひしても月　兎麦
枯て顔枝とは見へぬの花　蓮泉
空とゆふ意もうしおき呉かな　梶塘
ゆり出る一日折く柳かな　凜木
旅衣もかはしゝる四州衣　石竹

瓢のみ菜ニ示出され行てさわ　女平 文慶
宵月夜招きもらひけるあさかほや　秋戸
風ふる絡や松の葉ハちるて
まれ成て風に吹出る芭蕉（芭蕉）　一雨麦
夜もあけて見せたり谷の奥　草太
涅槃会や人を黒餅の仕たい哉　耳鈴
捨られし離れし葎を出る柳哉　麦逢
行く秋や案山子の毎夜残させて（遺）　豊調
木隠に吹きられて山路かな　亀男
手折ふと思ふ怨いふし雪の花　松羽

三歌題　夕良

うれしさや老や夕良の花の皺　臨之
夕良や隣を絶し家八合御　賎千
夕良の地に這ふ花を長かな　巴芳
夕良の花や葉をつる垣寺　棟石
夕良の葉やおちこちの物語　簑笠
夕良は更に檜垣の堀かな　大川
中ふちの小葉茶さけ出る二葉哉　白景
笠出して暮れ行くも中ふちの（盆籠や）　風扇

同　昼良

昼顔の蔦後の洗ひ笑らん　棟石

たれ鳥乃出るに蛍乱の盛哉　呈保

蛍飛ぶや井出の里の旅ごゝろ　同景

ひろ飛ぶに清水こえてほたるかな　哲之

蛍飛乃乱れて涸りけり　蓑笠

皷子花や湯起清津に舞堂　大川

皷子花や見えた老の雲路　風扇

皷子花や浅井縄のめぐむ縺　文錦

同　萍花

萍茂乃根をさえ乱る哉　蓑笠

白萍洞まよふ志ひの思通　楳石

萍抛の流れにともなふ那　哲之

萍や軽く乃中しこち　大川

いさゝかは又の満ち潮律那　止敬

萍や今朝とさ川の郭公　東山

萍乃四十の花やふみて　風扇

いさゝかは道や咲りく夕の縁　四景

夕顔

三ケ月白一川を煙る夕ぐれ哉　越人

夕顔の垣しを高き乃軒郎　貞字

朝白

朝白け唄と洞ち師走哉　貞字

三の白　四季之句

春

蓬莱や御国乃かさり檜木山　杜國

大服やあさには咄をさる和哥　旦藁

鶯の鳴つゝきれたり韓退之　回示

饅頭で信氏の音之寒の梅　文鳥

　前とり野らる人の評ありて

梅いさゝか合はむかしの香ひ哉　三語

黄鳥や松にも梅の匂ふ哉　止敬

　芭蕉庵たしかにまたりけるをり
　　かしこへまいりけれは

さてこそ富士見るさるを柳哉　野水

雨ならはぬれてもさそ柳かな　大川

松風乃琴の糸よる柳かな　樗石

　久米仙人の通力ちかく草しとよ
　　わかれ加賀の女のうらやみける

舞蝶や撞木をとりて根芹哉　風扇

袖にさへ旭さして胡蝶哉　四景

猫の妻竈乃崩れよりかよひ亀　岱羽

　旧里残したれて伊良古に住ませて

東風さそふ谷吉原と似たる空の色　杜国

野はさなからさくらの花の菫　越人

花丁寺師因養景

明けのもこの谷残越しらぬちゝの山　巽

八九の古はむかしのまつりかな　越人

文時々の通ありけり

一花に白き鶯は小槌かな　越人

菊なり生ある形も雉の夕かな　可遠

中たる弟等らへ條の白き桃　我人

風我今日の小兄弟茶摘かな　三笑

夏

鈴花ありとて橘死して大乗記　素堂

花まで耳に菖蒲も節かな　我人

枡よき頃は歌も歌のさ川邊　文鋪

童歌の口に正月やむかし頃　大川

東雲とはんかな芍薬花　三諾

あやなき生り折の鶺鴒のかくれ頭　蕉翁

化城喩品に十六王子出家因の
心を

一輪も実なる十六菊かな　操石

あふに是とれあふし百合の花　風扇

山ちかし嵐めし卑五月ゆか　杜國

五月雨のちかれ茂るや庭形紅　越人

五月雨や捨てらても紅田か　三笑

朱子葡萄学の文我しくるし

学んで所桜芽してくれ新茶　越人

木曽路の橋をあとにちて大津にて
とかく比中川幟田北堂我見る

あかく
けふなる田舎の月にくるゝ人　蕉翁

掃捨乃流水ゟ秋わたる哉　鳥中

買之ヶ影のちる乃清水哉　之人 龍泉

出路鷺か羽をのはす夏の暑かな　犬ゝ

夕雨や晴ては欄乃庭　三笑

照雨も出る青風の林哉　我人

雨夕暮松のあはれを揺鶏居　同京

沖すゝし松も出ると夕暮　哲之

黄昏て仕舞ふ日の稲の耶　趣人

穐

とんぼうやあれおひやるか小庵　荷兮

文月の対するや七夕の旅の空　棣石

初秋の姿我見ゆる三日乃月　大川

まつしろ乃三のきやかれ扇　呈俚

魂棚や大工としるあり秋扇　凬扇

たて鳴ほに秋の結ぶ夕部　趣人

秋にの酒の力哉秋の雲　鄙水

秋の寝起は秋の夕暮　蓑笠

舟と畑も秋の夕徳　南　文錦

岩の上に夕日わしと赤蜻蛉　如流

鄙水の旅行に送りて

見返りの宿しらや寂し秋の雨　翁

来れ草かすそと柳しき岸臨　鄙水

寛文の比何晩紹益と云人ありける

急く深きの鰹の子をや今日の節　荷兮

鰹乃料理ほうりけれ
鰹乃子と人の鰹の世のあはれ

艸の底を行人はりけり
艸乃中の花行く人の中より北有　昌碧

渠今正是我　我今正不是渠　越人

月入て我もろともに黙る哉

雲よりも月見よと...もみ残し　己諾

こよひとぞにてもふかき月の花　越人

月はやき貧乏の花の花野哉

山深し杜耳はね木の本達　荷兮

杜国を送りて
旅人も...あはれ

日の出て松は雲吹ふく也　越人

虎の尾を北露かほ蛸　杜国

一房に手をかけ菊の落葉かな　笠蓑

秋の庭を残されて秋やそよぐ　風扇

冬

こぶしたてて仁王の冬の雲　其角

浦の家に人もなく冬の風　越人

村々の吹のかせに風情かな　風扇

雪の波見ればをかしつ　文鱗

見らしかし種まきの路の雨　止敬

帰りし花に花のたね秋　大川

枯柳女を生き死し寒の風　三笑

波乃月きえ小子鳥の鳴夜かな　一晶

羽中麦の夜そ似たる霜の戒　騏千

寒月大礫の峰照れるかな　文鱗

雲霧冴て筆の硯に消ぬらん　翁

此句は尾陽昌主をとむらひて也

是は残行の集よやらん詠て遣す

あやまれり

。元旦。の雲の橋の南といふ

すさき

蝶ひの南を志きさきあやさきるを　其角

日しく宿の西といふ山とを

雪乃日。山中あふ水に濁の山の碧水

初雪や柿簾と富士の兼あり　越人

吉川雪や起て酒迎都鳥　同景

ほつほつ紅葉巳と茶入の投び中　楼石

雲乃まる小の枝くし唯小星　之諾

晴れ雪ふるふ夢あり遊　養笠

文字の行すへ来し雪の日　亡人眺松

鶴の水の瓢たくの根芹に白き実哉

此根芹鉢たゝきふ小振あり　其角

霰ふる志かる嫁の嫁那　巴静

柊ゑぞ早し梅のく遊　養笠

ちしの雲秋の荻似たる鳥かな　梛之

光しはの誰よこ中ら吹螺かな　越人

としニ顔きしら孫せし火鼠　嵐雪

古法眼出とこあはれ年の暮　翁

尾州古名や書林

木村猩々堂板行

顔あしくこゝろ乱ありそて此容白
やこ寶蔵神のどしうこゝ西大是
乃かくらゝ高ひ顔ゆとおし須
紹乃わすに常六月の人此我かと紙
うし巻のはしてゝ高士二碑の黒思
我はられこゝ又の乱ゝ須くを取あいと
是こゝめ眉我玄らの趣ゆるすれしの
活法少人ハ少なる人さなる人し
是こ一毛此変化をまゝ此其容貌く
乃趣意をさふかしゝてあるまて
具我をいひあるハ西風とあらって
茗我あしきふニ凝人よらむ

情しらぬと云人達て事俳の基歟
革れし頭額に新古の姿様哉
和哥の旧例を拾ひ師の境に入るる
人々まさに我ほくに栄しるく
うきよ流行の猿人ならて云ふ事をもちる也

丙年
仲秋上浣　百長堂
風扇跋

小野小町か歌のさまをさへ婦さく
たよりなしと謡はれさりし紀
文字なら縁りしそのをあはれ
有情さし聞のまいて見ぬも流れの紀
りしくのまいふをとめきりし
あはれや能の紀和葉のましみ
精をあきりしうとし女めき
りしそれいは男の紀りし書のまい
田舎あきりし雨あはれやいのちく
あ紀りしゃうしくとかしくい
奴あきりし　とかし

茶の一圓字

えにしにし

よしなしや棲網の芥と成り津　嵐雪

去人影やあをし園乃一株（ヒトツ）松　其角

此歌八ゟ盛岳父人の家宗山子作　千代